

## 特集

子どもの発達保障と遊び

## 集団遊びと幼児期の学び

### 所属感からの検討

田中 浩司

**要旨** 近年、楽しみながらの学び (playful pedagogy) の有効性を示すデータが積み上げられるなか、国内でも、接続期における遊びと学びとの関係を捉えることが、実践、研究両面での重要な課題となっている。本研究は、所属感 (sense of belonging) の観点から、保育の場で取り込まれる集団遊びを分析し、遊びを通した学びを捉える新しい視座を得ることを目的とした。3歳児クラスで行われたルール遊びと、5歳児クラスで行われた構成遊びの保育実践を分析した結果、所属感と関連し、①経験の多様性への気づき、②互いに必要な仲間として受け入れあう経験、③興味・関心を共有することによって生まれる安心感、という3つの要素が見出された。これらの結果は、協同性の育ちとの関連から考察された。

**キーワード** 集団遊び、所属感、協同性、楽しみながらの学び

#### 1 集団遊びの発達的特徴と保育者の援助

集団遊びは、幼児にとって、人と関わる楽しさを感じながら互いの考えや思いを理解し、調整する、社会的経験のプラットフォームとなる。こうした集団遊びは、おおむね3歳後半から見られるようになり、幼児期後期にかけて、仲間間でテーマやルールを調整しながら、遊びを維持、発展させるようになる。本研究で取り上げる集団遊びは、こうした「保育の場において、複数の子どもがテーマやルールを共有して展開する遊び」をさす。

保育の場で見られる集団遊びには、子どもたちが自発的に形成した集団で遊ぶものと、クラスやグループ活動といった保育活動として、保育者の援助のもとに取り込まれるものがある。子どもたちが始めた集団遊びが保育活動として取り入れ

られることもあれば、その逆もありうるが、これまでの研究から、両者はその規模や内容から、質的に異なる遊びであることがわかっている。

自由遊びの場で、2歳半から5歳までの幼児が自発的に形成する遊び集団の規模 (group size) を検討した Smith & Connolly (1980) によれば、2歳半から4歳前半の子どもたちの半数以上が2名で遊んでおり、5名を超える遊び集団は10%に満たなかった。また加齢に伴い集団規模は大きくなるが、4歳前半から5歳までの子どもたちの集団規模は最大8名 (出現率0.2%) となり、9名以上の遊び集団は見られていない。また遊びの古典的研究として知られる Parten (1933) でも、自由遊び場面で子どもたちが形成する集団規模が測定されており、そこでは4歳までの観察ではあるが、5名以下であったとされる。

このように、幼児だけで遊び集団を形成した場合、保育活動として取り込まれるような、10名や20名規模の集団が見られることはなく、比較的小規模な集団で遊びが展開することがわかる。

また、自発的に形成された集団での集団遊び

と、保育活動として取り入れられる集団遊びとでは、遊びの内容にも違いが見られる。

3、4歳児の遊び形態と遊びの内容との関連を検討した Rubin, Maioni & Hornung (1976) によれば、本研究の対象である集団遊びとほぼ同義である、連合遊び (associative play) 及び協同遊び (cooperative play) の内容は、身体活動を中心とする機能的遊び (functional play)、折り紙や粘土などの構成遊び (constructive play) やごっこ遊び (dramatic play) に限られ、保育の場では低年齢から取り込まれるルール遊び (game with rule) はほとんど見られなかったとしている。

このように、自由遊び場面と保育活動とでは、集団規模や遊びの内容にも大きな違いが見られるのである。

#### 2 集団遊びに関わる大人の役割

保育活動としての集団遊びは、保育者による援助のもとに楽しめる活動である。10名や20名を超える規模の遊び集団を保育者はどのような視点で捉え、援助しているのか。

田中 (2007) は、集団遊びの一つである鬼ごっこの成立・発展過程における大人の役割を足場作り (scaffolding) の観点から分析している。ここでいう足場とは、建物を建てる際に足がかりとなる骨組みを指す。建物ができるとつれ、あらかじめ支えとして作られた骨組みは取りはずされる。こうしたプロセスを乳幼児の発達における大人の役割のメタファーとして用いたのが、足場作り理論である (Bruner, 1976; Bark & Winsler, 1995)。

田中によれば、ルール遊びとしての鬼ごっこが成立する3歳から4歳にかけて、保育者は子ども個人のルール理解を促すよう、「捕まえるぞ (オニ)」、「捕まえてごらん (コ)」、「捕まった、〇〇ちゃんのオニ」等の言葉をかけることがあるが、こうした関わりは言葉をかけられた子どもだけでなく、その様子を目にし、耳にしている子ども集団全体のルール理解を促す機能をもつとされる。

また、より集団的な鬼ごっこへと展開する5歳以降、保育者がチャンピオンの胴上げのように、個人の勝ち意識を高めるよう働きかけると、それまで協力関係が成立していた集団が壊れることがあるという。このように、集団遊びに大人が関わるということは、それが個人に対する働きかけであったとしても、集団全体にインパクトを及ぼしていることがわかる。

上記の足場作りは、保育者の関わり機能を第三者的視点から分析したものである。では、保育者自身は、自らの関わりをどのような視点から捉えているのか。

田中 (2010) は、保育経験9年目以上の保育者10名を対象に、5歳児クラスでの鬼ごっこの援助場面を振り返るインタビューを行い、「集団として鬼ごっこを楽しむための援助のあり方」という視点から保育者の語りを分析した。その結果、保育者は、集団としての「遊びの流れ作り」を行いながら、流れの中に子ども自身の意志で参加するように「主体的参加への誘導」を行い、その上で、遊びの中で問題が生じたときには子ども自身で解決できるようにする「自己メンテナンス化」に向けた指導を行っていることが明らかとなった。また、これらの援助をつなぐ形で、子どもの遊び経験をつなぎ合わせ、経験に連続性を持たせる「経験の積み上げ」を行っていることが示された。

#### 3 楽しみながらの学び

このように、保育者は集団として遊びを楽しむことを目標としながら、「自己メンテナンス化」に見られる、子ども同士でトラブルを解決するといった、学びの機会を提供することを意識している。

こうした遊びを通して、子どもたちの学びを促す教育は、「楽しみながらの学び (playful pedagogy)」と呼ばれ、近年、欧米を中心にその効果が示されてきている (Broadhead & Burt, 2012)。

楽しみながらの学びにおいて重視されるのが、